ほっとファミリーは養育家庭の愛称です。

養育家庭（ほっとファミリー）
体験発表集
（平成21年度）

東京都福祉保健局少子社会対策部

「養育家庭（ほっとファミリー）体験発表集」の発行にあたって

都内には、様々な理由で親と一緒に暮らすことのできない子供が約3,900 人います。このような子供たちを、実の親にかわり、家庭的な環境の下で育てているのが「里親」です。

都の里親制度は、「養育家庭」と「養子縁組里親」に大きく分かれています。とくに、養子縁組を目的としないで、子供を家族の一員として迎えていただく里親を「養育家庭」、又は「ほっとファミリー」という愛称で呼び、普及啓発につとめています。

そして、このような子供の状況とほっとファミリーを理解していただくため、都では各区市町村と協力し、養育家庭（ほっとファミリー）体験発表会を開催しています。

この冊子は、平成 21 年度に開催された養育家庭（ほっとファミリー）体験発表会において、ほっとファミリーの方々に発表していただいた内容を要約し、冊子にまとめたものです。

初めて子供に出会ったときのことや交流中の出来事、委託後の子供の赤ちゃん返りや問題行動などへの対応など、子育てに奮闘している様子が描かれています。また、真実告知や実子との関係など、里子を育てることゆえの悩みについても語られています。

しかし、そういったご苦労の中にも、子供が少しずつ家庭になじんで心が通じ合っていくのが実感でき、ほっとファミリーをやっていて良かったというものや、子供から喜びや幸せをもらっているというものなど、ほっとファミリーとして経験した子育ての素晴らしさにも触れています。

より多くの都民の皆様にお読みいただければ幸いです。

平成２２年９月

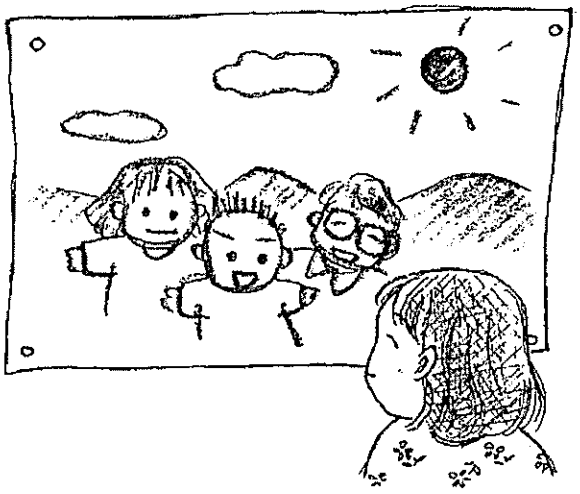
東京都福祉保健局少子社会対策部育成支援課長
平　倉　　秀　夫

目　次

1　A君ありがとう ………… 2
2　イメージと現実の狭間で ………… 4
3　少しずつ近づいて ………… 6
4　養育家庭の良さ ………… 8
5　里子は地域の一員 ………… 10
6　みんなママやパパが欲しい ………… 12
7　子供を丸ごと受け止めることの難しさ ………… 14
8　短期でお子さんをお預かりして ………… 16
9　子供との交流から学んだこと ………… 18
10　育てることで自分も育つ ………… 20
11　旅立つ娘に、今伝えたいこと ………… 22
12　施設も里親も長い目で ………… 24
13　「癒し」を感じてくれたら ………… 26
14　不安を乗り越えて ………… 28
15　おうちかえる～ ………… 30
16　コウノトリが運んでくれた宝物 ………… 32
17　幸せ路線へ ………… 34
18　長い交流を乗り越えて ………… 36
19　子供にとっての新しい家族の形 ………… 38

養育家庭（ほっとファミリー）

体験発表会に、ようこそ！！



この体験発表集には、19人のほっとファミリーの方たちの養育体験が赤裸々につづられています。

より多くの方々に、この養育家庭制度を知っていただき、ご理解と共感を得られることを、何よりも願っています。

そのことが、ほっとファミリーの方と、そこで生活する子供たちを支えることにつながるのです。

1　A君ありがとう

【里母】

私は、平成２１年３月までＡ君という男の子を３年半預かっていました。３年生の終業式を終わって実家の方へ戻すことができました。

Ａ君は里親手続きをしてから１年後に話のあった子です。５歳のその子は公園に放置され、髪の毛は伸び放題、汚れた衣服で足のくるぶしまで真っ黒で、裸足だったというのです。警察の保護を繰り返し、食事もろくに与えられず、痩せていて背も低かったのが児童相談所にきてから伸び始めているとのことでした。ネグレクトで被虐待児ということで、本人はニコニコしていて明るくかわいい子で、そんな過去は見受けられませんでした。主人は一遍で気に入り、交流が始まると「今日はおじちゃんのところに泊まりに行く、一緒に行く」と主人の手を離さず、しゃがんで泣いたのです。施設の中でＡ君だけ外泊をしたことがなく、日帰りなのに「今日、俺、外泊」と２～３人に話していました。長期外泊の７日目で施設に送っていった時には柱にすがって別れを嫌がり、大泣きをしました。辛くて二人とも逃げるように帰ったことを覚えています。１１月に、迎えに行くようにとの連絡があり、Ａ君は我が家の里子になりました。その日から私の本当の闘いが始まりました。施設からの荷物が届いた日、ダンボールを開けていると、荷物を取り出してわめき、暴れだし、ばら撒き、そこいら中に散らかして、もう止まりませんでした。まるで火山が爆発したようでした。やっと彼の興奮が納まると、私がＡ君を抱きしめて泣いてしまいました。主人は「飯さえ作ってくれれば良いから」と言って、約１ヶ月間２階から降りてきませんでした。コンビニではおもちゃを欲しがって泣き始め、文句を言って泣き、怒鳴って泣き、ずっと泣き続け、涙がかれるほどという言葉がぴったりでした。長く泣くことが続いたので、テープに泣き声を録音して彼が泣くと流しました。テープと一緒に泣いて、最後は笑い出してしまい、長く泣くことはそのうちしなくなりました。赤ちゃん返りもあり「哺乳瓶でミルクを飲みたい」と言い、粉ミルクから始まって牛乳、ジュースと続いて止めました。次はおしゃぶりです。ガチャガチャ、クチャクチャと噛み、歯が生えているのでおしゃぶりではありません。決して人前ではしませんでした。１年生の間は続いていました。何もかもが０歳児からやり直しでした。この子が一人前の子供として自立するためにすべてが必要なことでした。

Ａ君は絵を描くのが好きでした。怖い絵が多く、絵本も怖い本を好んで選んでいました。自分が殺されている所を描いた絵は、あまりの凄まじさにびっくりしてしまいました。半年過ぎた頃、主人とＡ君の二人で江ノ島に行きました。初めての海に小躍りして喜び、帰ってきて描いた絵がびっくりするほど明るく、雲の絵をいっぱい描いていました。手を挙げる動作にさえ怖がり、餅つき、ドッチボールなど何でも後ずさりをしてしまいます。１年たった頃サッカーを主人と見に行って怖いものと縁が切れました。今ではサッカー部で活躍して

います。

A君は生まれてから予防注射を１本も打っていません。A君の命に関る大事なことです。白紙の母子手帳を作り、風疹、麻疹、３種混合、ポリオ等時間を置いて次々に実施しました。赤ちゃんの中で一番大きい子でした。A君もよく頑張りました。

２年が過ぎ、すっかり落ち着いてきたと思った頃、兄弟との交流が始まりました。面会の日は学校から急いで帰り、楽しみにしていましたがしかし、その翌日から再びA君がたいへんになってきたのです。クラスの中で大声を出したり、物をかじり始め、ノート、教科書、下敷き、ランドセル、机など何でもガリガリ噛んで再び泣き始めました。便をトイレの壁に塗りたくり、物事がすべてルーズになり、次の行動の切り替えができないと担任の先生より電話を貰いました。宿題はやらず、私も自分の坐骨神経痛もあり、心も体もへとへとになりました。自分のことは何一つできず、A君にかかりきりでイラつき、彼にも優しくできないでいました。桜の満開を迎え、少しずつ自分を取り戻し、子供を地域で育てる時代という言葉に深く賛同し、里親を希望した私ではないか、子供の可能性を信じて、希望の翼を広げて飛び立つまで心を砕き、力を注ぎひたすらに全部を受け入れて行こうとA君と手をつないで歩きながら気持ちが落ち着いていったのを覚えています。A君は、その後も兄弟とキャンプに行ったり、母親との接点を持ったりして、外泊ができるまでになっていきました。

A君によって夫も変わりました。まるで自分の子供のようにかわいがりA君もよくなついていました。ゲームを買いに秋葉原まで行き、男同士でお風呂に入ったり、一緒にテレビを見たりして、夫はA君のいい友達でした。

３年生になるとA君は見違えるほど変わり、首の汚れもなくなり、笑顔が素敵でクラスの皆から笑顔大賞と言われるほどでした。代表で司会をやったり、学芸会で主役の一人をしたり、友達もたくさんでき、国語、算数はクラスで一番でした。本に関しては毎晩寝る前に読み聞かせをしてやり、５００～６００冊は読んであげたと思います。

A君と夫と３人でよく旅行に行きました。鴨川シーワールドのシャチに驚き、感激していました。旅行の時はどんなに朝早くても飛び起きて、何日も前から楽しみにしていました。A君が変わったのもこんな旅行が楽しかったことが原因だったかもしれません。A君は私のことを「みいさん」と呼びます。でも人前では「お母さん」でした。私は下手な絵ですが描いています。私が絵を描いている時はA君も絵を描いて、私が物語を作っている時はA君もお話を作り持って来ていました。その時が私とA君の大切な絆の時間だったと思います。昨年３月にクモ膜下出血で倒れ、絵を休んでいると「みいさん、絵をやめたの？絵やめないでね」と言われ、はっとしました。「みいさんの料理が一番おいしいよ」ともよく言ってくれました。子供とはありがたいものです。心を豊かにしてくれます。A君は私たちの大切な宝物でした。私たちは別れの日に泣きませんでした。数え切れないほどの人に守られ、助けられて歩んだ道のりでした。A君、元気でね。そして、ありがとう。

2　イメージと現実の狭間で

【里母】

私が里親をやろうと思ったきっかけは、私も夫も福祉関係の仕事をしていて制度を知っていたことと、子育てを経験してみたいという思いがあったからでした。おそらくＮＨＫの「瞳」という連続ドラマのようなにぎやかで楽しい家庭をイメージしていたのだと思います。

いまから 2 年前に里親登録してその年のクリスマスイブに今の子供を迎えました。私たちは子育て経験がなかったうえ、その子供は不思議なことに交流していた約 6 ヶ月間は全く問題がなかったものの、いざうちに来ると所謂「試し行動」をきっちりと 3 ヶ月ごとにやってくれました。彼の頭の中には一緒に暮らしたことがなくても実の母親のイメージがしっかりあって、委託前「僕はＳさんちの子供になってＳという姓を名乗って、お父さんお母さんと呼ぶんだよ」と言っていたのが、委託が決まった途端「僕はやっぱり自分の姓で暮らしたい。Ｓとは名乗りたくない」「Ｓさんのことをお父さんお母さんとは呼ばない。やっぱりそれは変だもん」と変わったのでした。結局私たちはそれを受け入れ、彼は私や夫のことを今でも名前で呼んでいます。またうちに来た当初から私とは絶対にお風呂に一緒に入りませんでした。6 歳の子供が「恥ずかしいから」と言うのです。何かとても微妙な距離感がありました。

また、些細なことでパニックになって「もうこんな家いやだ」と近所中響き渡るくらい大泣きすることも結構ありました。そんな時はなだめながらも、うちにはうちのルールがあって、それは譲れないということを彼に伝え続けました。

あとは、落ち着きがないことで、うちに来て半年位の間何度も病院に行くような大怪我をしたことです。最初は私たちだけで何とかしようと思っていたのですが、さすがに児童相談所に相談に行きました。そのときに、おおよその成育歴は確認できましたが、詳しいことはわかりませんでした。小さい頃からずっと継続して関わってくれた人が、児童相談所にも施設にもいなかったからです。その時は胸を突かれる思いがして、改めてどんなことがあっても私はやっぱりこの子を見て行かなければならないと思ったのでした。

私はこの子を引き受けて以来、目の前の問題行動に翻弄されるあまり、勝手に「養育家庭」のイメージを作って、そこに何となく子供を当てはめようとしていたのではないかということ、更に私たち夫婦だけではなく様々な人たちの援助を受けていかなければ子育ては成り立たないということに気付くことができたことでした。

私は子供と向き合うために必要なことが３つあると思います。その１つは、よき相談相手を探すということです。自分の夫、父母や家族、親戚の人たちは身近でとても重要な存在です。また、心理士や里親担当、子供担当といった児童相談所のスタッフからのアドバイスや面談などにより「試し行動」なども少しずつ落ち着きを見せてきています。特に 2 年生進級時、新しい担任と相性があまりよくなくて学校でいろいろ問題を起こしたのですが、学校

との調整も児童相談所スタッフに対応していただきました。また、里親と子供を支援する目的のアン基金という団体があります。お願いをすると先輩の里親さんが月 1 回訪問してくれて、じっくり話を聞いてくれたうえ「Ｓさん、すごく頑張っていると思う。もうできないという気持ちには皆なるんだよ」などとアドバイスをしてくれました。自分が認められると、また子供に向き合う元気がもらえるのです。このような団体だけでなく、里親同士の情報交換の場を通じて体験を共有することで大いに勇気付けられることも沢山ありました。地域の中でも、子供が「この人、偽者のママなんだよ」などと言ったことから、私は子供の通う保育園や小学校で学期の始めの保護者会でこの制度の話をしてお母さん方に理解していただくことにしています。それ以外にも古くからの友人が心の支えになってくれています。

もう１つは、子供を理解するための努力です。例えば「愛着障害」とか「学習障害」といわれる特性を持つ子供への接し方や考え方を本で勉強することも自分にとってとても役に立ちました。

最後の１つは、自分の持っているイメージをもう一度見直すということです。ただ漠然とした『温かい家庭といい子に』を実現させることにはこだわらず、目の前にいる子供が幸せだと感じるためにはどうしたらいいのか、ということを考えることが大事なのだと思っています。

今でこそ、わりと落ち着いた生活を送っているうちの子ですが、1 学期は授業に出られなくて保健室で過ごすことも多い状況でした。少し改善が見られるようになった時私たちも「すごく頑張ってるね」と言ってあげると、子供も自尊感情が出てきて「そう、おれってすごいんだよ」と表現できるようになってきます。こういった日常のやり取りが徐々に不安を解消して落ち着きに繋がっているのだと思います。

子供と過ごしてきたこの 1 年半を振り返って、家族というのは私も、夫も、子供も、みんなが努力を重ねて作っていくものなんだなということを痛感しています。うちの子もそうですが、施設で育った子供は見捨てられる不安を常に抱えています。

それを解消するには、日常生活を積み重ねることによって里親の家で暮らすことが楽しいと感じてもらえるようになることが一番なのです。安心できる環境が整ってこそ自分を大切にし、人から愛され、人が好きになるようになっていくのではないでしょうか。

そういう意味で、ようやく我が家は一歩ずつ前に進み始めていると実感できるようになりました。これからも楽しい家庭作りを心がけていきたいと思っております。

3　少しずつ近づいて

【里母】

現在、我が家は、夫、私と、男の子の里子K君の３人で暮らしています。実子はいません。20 年以上前、子供ができずに悩んでいた私は、新聞の投書欄で里親さんがいろいろ投書されている記事を読み自分もやってみたいと思いました。でも、夫が自営業を始め、私も手伝うことになり大変忙しく、その後、親の介護も加わり、頭の片隅にいつもやりたいという気持ちを残したまま時が過ぎてしまいました。実際に里親登録したのは約２年前です。このように長い間やりたいという思いを持ち続けてきましたのは、40 歳のときに男児を死産したことが大きいと思います。

登録９カ月目でK君を紹介されました。K君は、当時グループホームという、幼稚園児から高校生までの子供男女６名と世話をする先生数名が一軒家で生活する施設におり、大変元気で、子供らしいかわいさにあふれた子供で、私たち夫婦は舞い上がるような気持ちになり、グループホームの責任者から言うことを聞かない子供だけれど大丈夫かと言われてもあまり注意を払いませんでした。

でも、交流が進み、我が家に泊まるころから、自分の主張を絶対曲げない子供だということがわかりました。大変頭のいい子で、自分でも頭のいいことは承知していて、頭のいい自分は人の指図など受けないと、優しく対応していた私たちは甘く見られてしまい、私たち夫婦の方こそ自分の言うことを聞けとなってしまい大変困りました。児童相談所からは、家族とか家庭を知らないで育った子供なので、他の里親家族と交流して親子の関係などを見せてほしいと言われました。この時、６歳の子供にとって知らないということは、ゼロに近いくらい知らないんだということに気づかされました。

確かにK君は、「なぜ自分だけが（夫や私の言うことを）一方的に聞かなければいけないのか説明して。自分が言うことを聞くのなら、（夫や私も）自分の言うことを聞け」と言いました。「私たちは友達ではなく保護者なんだから」と言いますと、「保護者って何？」と聞かれ、ああ、言葉が通じないと思いました。それからはサザエさんやドラえもんのような家族の出てくるアニメなどを見せ、家族や家庭について少しでも知ってもらいたいと努めました。本人も結構真剣に見ていました。

現在、交流から数えますと１年ぐらいたちますが、約１カ月前より急に赤ちゃん返りし始め、寝るときには「バブバブ」と言いながらはいはいして布団の敷いてある部屋まで行くようになりました。児童相談所の担当者から、「だっこしてあげてほしい」と言われ、だっこするとそのまま眠ることもあります。我が家に来たばかりのころは、30 分以上もタックルされてへとへとになったときから比べますと随分様変わりしてきました。ここ１週間前ぐらいから、「大好き」と言って私の胸に顔を埋めてきたりします。これも、半年前「大好き」と言って首を絞めてきたときとは大違いです。その時は、本当に大好きなのか、それとも首

を絞めているのかわからなかったのですが、夫も首を絞められたというので、やっぱり首を絞めてきたんだと思いました。まだまだ朝、起こそうとしたら蹴られたり、ひどいときはほっぺたに平手打ちを食らわされたりするときもありますが、少しずつ近づいてきてくれるのを感じます。

子育て自体はまだ悩みが多いのですが、多くの人と知り合いになれ、交流していて楽しく、よかったと思っています。また、K君が来てくれてから日々に変化があり、2人で漫然と暮らしていたころから比べますと、とても生活が生き生きしています。

子供を育てて大変だったことはたくさんあるのですが、一番大変だったのは、朝K君を幼稚園のバスに乗せることでした。園バスの運行の関係でグループホームにいた頃よりは1時間早く家を出なければならず、よく毎日間に合ったと今でも思うくらい綱渡りの毎日でした。「早く」と少しでも手を引こうものなら、てこでも動かなくなってしまうため、いかに急いでいることを悟られないように迅速に行動するか知恵を絞る日々が続きました。気がついたら4カ月で9キロ体重が減っていました。

現在、小学校1年生ですが、入学前に大変心配していたのは、クラスの子供たちと仲よくやっていけるかということでした。施設の子供たちの中には人間関係がうまく作れない子がいると聞いていたからです。

「幼稚園でいじめられる」と言うので、どのようにいじめられているのか聞きますと、皆が「K君には気をつけろ」と言って遊んでくれないそうです。仕方なく年下の子と遊んでいるそうですが、すぐに思いついたのは、大勢の子供が暮らし、常に競争にさらされている施設のルールをそのまま幼稚園に持ち込んで他の子供が引いてしまっているのではないかということです。それで、「1人だけ目立ってはだめ。みんなと行動を同じにして仲よくしよう」と繰り返し言いました。毎日、「みんなと仲よくしようね」と言うのですが、「何で？」と言ったりすることもありました。

何とか友達と仲良くできるようになったようですが、それでも不安でしたので小学校入学時に学童に入れました。最初は「つまらない」と嫌がっていましたが、じきに友達ができて、今は安心しています。同じ年ごろの子供たちとよく遊んでいるようです。

朝、登校のため友達が迎えに来てくれますが、一緒に行けることはあまりありません。私が「用意がまだできていない」と迎えに来てくれた子に言うと、「やっぱり」と言って学校に行ってしまいます。それは、夜なかなか寝ない。それで朝は起きられない。また、目が覚めてもわざとごねて起きないこともあったりするからです。寝つくまで添い寝している私には、睡眠時間が減ってとてもつらいことのひとつでもあります。

里親制度には研修が色々揃っており、その中の『学童期の子育て』という研修を受講したのですが、他の子ができるからといって里子ができるとは思わないでほしいと言われています。なかなか皆と行けなくても長い目で見ていこうと思っています。

4　養育家庭の良さ

【里母】

私の住む市は、子育てがしやすい環境にあります。自然にも恵まれ、山がとてもきれいで、すぐそばに川も流れていて夏にはバーベキューもできます。

我が家は、主人と高２を頭に中３、中１、小５の４人の娘がいます。一度は社会に出たものの、子育てと仕事の両立に悩みました。そんなとき親戚が養育家庭をやっていたことを思い出し、「子育てだったら私にもできるかな」と思いました。ただ、子育ては母親１人が頑張れば良いものでもなく、家族みんなの協力が必要ですから登録前に主人や子供たちと相談したところ、親戚が養育家庭をやっていたこともあり、「やろう、やろう」とみんな前向きで、登録となりました。

里親認定証が届くと、「いよいよこれで私も養育家庭だ。いつ子供が来るのかな」と期待しました。家庭を必要とする子供達がいると謳って養育家庭を募集していたので、すぐにでも子供が来るのではと待っていました。ところが１週間、２週間、電話の１本もありません。「何で？」とこちらから児童相談所に電話をしたこともありました。

未委託でも忘れられないようにと思って、児童相談所や里親会などから案内されるサロンなどの交流会や研修によく参加しました。すると先輩養育家庭のいろいろな話を聞くことができました。傷を負った子供の心というのはどれほどのものかということをしみじみと知らされました。家庭に慣れるまでの葛藤、どこまで自分を受け入れてくれるのだろうかという試し行動。例を挙げるときりがないほど、それぞれの子供にいろいろなことが起きるのです。養育家庭はもちろん、やって来る子供にとってもある意味「闘い」があるのだと思いました。小さい子が来て「また、かわいい子を育てられる」と楽しみに思っていましたが、生の声を聞き我が子の子育てとは違うことが起きるのだろうと覚悟のようなものもできました。いい勉強になりました。

結局、登録して２年間未委託でした。我が家は女の子ばかりですから、受け入れる子供も女の子を希望していましたが、未就学児までの男の子まで範囲を広げ、待ちに待って、ようやく２歳２カ月の男の子の紹介がありました。実親との交流をしていく子供でした。初めての面会では、どういうふうに接したらいいのだろうとこちらも緊張しましたが、いざ会ってみると可愛く、２回目の面会では私に飛びついてきてくれました。そうなるともう可愛くて、遠い乳児院に何度も通って委託になりました。我が家では初めての男の子で少々の不安はありましたが、実子であるお姉ちゃんたちの協力を得ながら育ててきました。やんちゃで男の子らしく育ちました。この子は、ある程度自分で自分のことができるようになる小学校就学頃には、家庭復帰するという前提で委託を受けましたが、来春がその時期です。子供を送り出す経験は初めてですが、きっと寂しいだろうなと思っています。

ところが、ある日、短期で中２の男の子の話がありました。彼は保護所にいて、大好きだ

った学校にも行けず、外出の自由もない。このまま一時保護所に長くいるのはよくない。かといって、施設もなかなかない。そこで「預かってほしい」と言われ、驚きながらも断れず、「１カ月でいい」と言われ、「それなら何とかしましょう」と引き受けました。

改めて考えてみると、社会的養護を必要とする子供の事情というのは大変なものです。その中２の子も父子家庭で、ある日突然父親が彼を育てることができない状態になってしまいました。そうすると、彼は身寄りがないので一時保護所に入所し、それまでの生活が一変するわけです。

体の大きい子で「いやあ、本当に大丈夫かな」と思いました。委託中は、帰宅が遅くなったり、警察のご厄介になって迎えに行ったりしたこともありました。そんな中、子供担当の児童福祉司は対応が早く、連絡もこまめにくれたため彼との生活がやってこれたと思います。彼自身は真っ白で、本当に純粋、素直、どちらかというと周りに流されやすく、もうちょっと要領よく生きなさいよみたいな感じのタイプの男の子でした。彼は、父親が仲よくしていた知人がいて、その人に会いに行ったりして、彼は自分の居場所、引き取ってくれるところを一生懸命探していました。本当につらかったと思います。その他にも、しみじみ話をすると、彼がボロボロと涙を流すこともありました。何かあってもついかばってあげたくなるような子でした。結局、委託は２ヶ月間に伸びましたが、彼の行き先は私も知っている施設で「彼もちゃんと中学校生活が送れるな、よかったな」と安心しました。最後に子供担当の児童福祉司が「お礼を言いなさい」と言ったとき、彼が大粒の涙を流してくれました。うちでひきとって良かった事を感じ、また、本当に養育家庭をやってよかったと思いました。胸がいっぱいになりました。

その後、彼は中学を卒業し、住み込みの仕事に就きました。児童相談所の手を離れて、自立しました。そうしたら、一番最初に我が家に来てくれました。一著前に手土産を持って、ちょっと突っ張った感じで。不思議と玄関に来たときに「あっ、来たな」とわかりました。２カ月間しか住んでいませんでしたが、お互いどこかで絆を感じていたのかもしれません。措置解除後の繋がり、それが養育家庭の良さではないかと思います。

今、３歳の男の子が委託されて４、５日目くらいになります。「お母さん」と呼んでくれるのが良いような、悪いような年齢になってきてしまいましたが、可愛いもので「お母たん、お母たん」と言って、癒し系の男の子です。今度は一生おつき合いすることになると思います。

帰る家がない、家庭を知らないということは、生きていく上においてどういうことなのか、その寂しさは図れるものではありません。受け入れた子供が家庭に触れ、幸せになった分、私たちは今、今まで感じる事の無かった家庭という、家族という幸せを感じています。これからも多くの子供を受け入れていきたいと思っています。

5　里子は地域の一員

【里母】

私は実子を男の子ばかり５人育てて、今は里子が２人いる生活をしております。里子は６年目を迎えた高校３年生の男の子、そして、１年経った５歳の女の子がいます。

私は25年間、地域の子供に関係することをしており、その中で主任児童委員として４期、12年活動してきました。主任児童委員として自分の担当した子供が里親のところへ行き、その後がわからないことがあったので、私も児童委員をやりながら里親になれば担当した子供を自分の手で育てられると思いました。子供にとって住みなれた環境で生活ができたら、不安や寂しさが少しはなくなるのではないかという思いが強くあったので、里親になるという決心をいたしました。家族は、「お母さんができるんだったらいいんじゃない」と了解をしてくれました。でも、やっぱり夫は「大丈夫？」という気持ちがあったのだろうと思います。いろいろな活動をしているので、そういう中で養育家庭もするとなると大丈夫かなと思ったようですが、「あなたの生き方だからね」と判断してくれました。そして東京都の研修を２人で受けて認定されました。

はじめの子供は、児童相談所から短期間受けてくれないかと話があり、面談をするとすぐに決まりました。子供が生活していた場所が私の住んでいる地域のすぐ近くだったこと、短期ということ、高校受験を控えている中学２年生ということで早く安定させたいということでした。当初は短期間と言われていたその子も、様々な事情から６年目を迎えて、来年の３月措置解除になる18歳を迎えます。うちから里子として自立していく第１号です。

その後、短期の子供を何人か受けました。中には多少非行性のある子もいました。その子供は、私が児童委員として担当していた子ということもあり、安定した家庭で生活させてあげたいとの思いがあり、３カ月という期間限定で引き受けました。家の金品に手を出してしまったり、万引きをして警察のお世話になったりということもありました。けれども、やはり子供はどの子も良いところを持っていて、家族の間では反抗もなく順調でした。年ごろで、表に向かって不満を出してはいましたが、家の中ではとてもいい関係で過ごすことができたなと思っています。

私はそのときに思ったのは、養育家庭制度の良いところは、児童相談所から預かっていること、児童相談所の担当の職員と綿密に連携がとれるということです。いいと思って受け入れても、子供の個性や相性というものもあるので、あまり頑張らないで児童相談所と相談をするところが良いと思っています。

私は女の子を育てたという経験はなく、育ててみたいと思っていました。女の子なら、幼児を受け入れたいという家族の希望もあったところに、児童相談所から思いもかけず女の子のお話があり、私は心が弾む思いがしたことをはっきりと覚えています。でも、知的障害がある子供だとわかり「育てられるだろうか」という不安が先に立ちました。夫と一緒に不安

半分で面接に行き、児童相談所の職員と子供が生活している施設職員の方と一緒に面接をしました。「このまま施設にいるのではなくて、家庭的な環境で育ててほしい」という職員の言葉に後押しされ、その子に実際に会いました。私はもうそのときに「この子を育ててみたい」という気持ちが強くなりました。それから交流をし、お泊まりの訓練を経て里子として我が家に来ました。今は保育園に入り同年齢の子供の中にいることで、多くの心配事はなくなりつつあります。おくれていた言葉、実年齢より 2 歳はおくれているという生活体験、友達と何かやる楽しさ、すべてを学んでこの半年の園生活での成長は著しいです。1 年前、言葉も半分くらいはわからず、夜はおむつが取れず、不安な気持ちをかみつく、ひっかくなど攻撃的な態度であらわしていた子でした。私はできるだけ 2 人だけの時間をつくるようにして信じて寄り添って過ごしました。泣いたり、甘えたりということもしなかった子ですが、最近は大きな声で私を求めて泣くようになり、抱っこをせがむようにもなりました。夜寝るときも、8時になると 1 人でお布団に行き寝るような子でしたが、今は「おばちゃん」と時計を指さして寝ようと合図をします。一緒に寝てほしいと感じ、私の隣で寝るという幼児時期の体験を今やっとし始めていると感じています。これからこの子がどんなふうに育っていくか、私は楽しみにしています。

家庭や親に一時的に恵まれなかったというだけで、子供に何か特別な問題があるわけではありません。だったら、普通に個性のある子供を育てると考えたら、とても楽しくなりました。今、私は自分の気持ちをそんなふうに切りかえてこの子と生活をしています。

私は既に 65 歳になっており、実子の子育ても一段落し、もし養育家庭にならなかったら今どんな生き方をしているかと思います。でも、養育家庭をしていることによって私は生かされているのかなと思っています。65 歳になると養育家庭の制度上では新しい里子は短期の見通しがある子ということになっていますが、この年齢だからできる子育てがあると思うので、今いる子を育てながら里親を続けています。

また、私は養育家庭が地域の中でどのように里子たちを育てながら、生きていくかということが大切だと感じています。これからは里子も地域の中の一員として育てていくことが大切だと思うからです。地域の中でみんなが声をかけてくれて、一緒に育ててくれていることが私はとても助かっています。里子でなくても子供というのは地域で自分を知ってくれている人がたくさんいることが幸せなのではないかと思っています。また、そうすると自然に地域の人も養育家庭を見ているわけですから養育家庭制度の理解にもつながっていくのかなと思っています。

今、子供の育つ環境は決して良いとは言えないと思います。苦しむ子供がいるときには苦しむ親もいるはずです。でも子供はたくましく生きる力を持っていて、大人の少々の手助けで伸びて行く力を発揮します。その少々の手助けを今後もしていきたいと思っております。

6　みんなママやパパが欲しい

【里母】

私の場合、里子が委託されてまだ３か月なので、体験というよりは、今までの経過を発表させていただきたいと思います。

子供は家庭で育つことが最も大事だと考えていた私は、実子が自立したら養護施設の子供を引き取って育てたいとずっと思っていました。８年前に娘がひとり暮らしを始めた時に、まずフレンドホームからと思い、近くの養護施設を訪ねました。初めて施設を訪ねた時のことは、今でも忘れられません。すぐに何人かの子供がぱあっと寄ってきて、その中の一番小さい２歳ぐらいの男の子が、自分の名前を言って、「〇〇ちゃんのママ？」としきりにまとわりついてくるのです。みんなママが迎えに来るのを待っているのだと思うと、何とも言えない切ない気持ちになりました。

最初にフレンドホームとして迎えた４歳の女の子は、とても人懐っこく、甘えん坊な子供でした。迎えにいく前の日からリュックを背負って楽しみにしており、帰る時には、施設の玄関で「帰りたくない」と大泣きでした。「また来るからね。今度はいついつ来るからね」と日にちを約束して、やっと帰るような状態が２年間続きました。その子が来年小学校という時に、施設から里子として引き取ってもらえないかと話がありました。その時には、まだ養育家庭をやると決心もしていなかったし、仕事も続けたいという思いもあり、「あと２年だけ待ってもらえませんか」と施設にお話ししましたが、この子にとっては小学校に上がる今が一番いい時期だということで他の養育家庭に預けられることになりました。その後もフレンドホームを続けて他のお子さんを預かってきましたが、最初のその子のことはずっと忘れられませんでした。その後養育家庭の申請をし、登録して今に至っています。

「女の子が希望なら何年も待つことがある」と言われ、フレンドホームも仕事も続けながらずっと待っていました。待っても待っても決まらず、だんだん気持ちが冷めていき、このまま仕事を続けながらフレンドホームだけを続けていこうかなど、いろいろ考えて、ちょっとつらい時期がありました。

その後、仕事を辞めて半年後に小学生の女の子と交流が始まり、私としては順調に交流ができていると思っていました。うちに来るととてもうれしそうで、そのまま決まると思っていましたが、二転三転して結局話は流れてしまいました。彼女は３歳で施設に入り６年間ずっと施設暮らしでした。彼女にとっては施設が完全に家庭のような居場所になっていて、そこから出ることは、自分がまた捨てられてよそに行かされるように感じ決心できなかったのです。うちに来ているときはとても楽しそうでしたが、いつも「自分のことは自分で決める」とはっきり言っていました。小さいうちから施設で暮らしていると期間が長くなればなるほど施設から出ることが難しくなるので、なるべく早いうちに里親のところで暮らせるよう考えてほしいと思いました。

その３か月後、今うちに来ている３歳の男の子Ｔ君の紹介があり、今度はとんとん拍子に話が進み、何か縁のようなものを感じました。最初に会った時から、すぐ寄って来て手もつないでくれましたし、まもなく長期外泊になって、散歩中など「おばちゃん、おばちゃん」と甘えて抱きついてきて、うれしそうに笑ってくれました。

でも、実際にうちに来てからはいろいろなことがありました。夜中に突然「おうち帰る」と起きて泣くことが毎晩のように続いていました。また、散歩の時は楽しそうに歌いながら帰ってくるのですが、家の前まで帰ってきて突然「おうち帰る、おうち帰る」、「バイバイする、バイバイする」と大泣きです。交流中、施設に帰る時に「ただいま」と言って帰っていたのを思い出し、もしかしたら彼の口から「ただいま」と言わせるようにすればいいかもしれないと、家に入る前に私から先に「おかえり」と言うようにしてみたのです。そうしたら「ただいま」と言ってスムーズに家に入ってくれました。本当にこの一言で解決しました。

委託後１ヶ月が過ぎた頃、１月ほど田舎に帰らなくてはならない用事ができ、どうしたものかと思いましたが、２歳の男の子を持つ姪が理解を示してくれたこともあって思いきって連れていきました。子供同士はうまくいったのですが、パパ、ママ、じじ、ばばなどと呼び合っている大家族の中で、だんだん姪たちのことをママとかパパとか言うようになってきたので、「Ｔのママじゃないよ、Ｒ君のママだよ」と言ったら、そこでまた大騒ぎが始まりました。「Ｔのママだ、Ｔのママだ。自分のママだ、自分のママだ」と寝っ転がって暴れます。「ママじゃない」と少しでも否定めいた言い方をすると、とたんに手がつけられないほど怒り出してしまいます。彼の中には、パパ、ママ、お父さん、お母さんという認識はまだ全くないようです。これまで若い男の人はお父さんやパパ、若い女の人はお母さんやママだったので、今、彼の頭の中はすごく混乱しているに違いないと思い、姪に対して、甘えて「抱っこ」をせがんでも、抱っこはしないように頼みました。そのうちに、今度は急に私のことを「Ｔのおばちゃん、Ｔのおばちゃん」と何度も呼んで甘えてくるようになりました。でもＲ君が姪に甘えているのを見ると、自分も寄って行き甘えていました。やはりパパやママが欲しいのだと思いました。彼にはつらい体験だったかもしれません。

まだ３か月ですが、彼が変わっていくのがよくわかります。大変なこともたくさんありますが、承知の上で始めたことなのであまり苦にはなりません。周りには、応援してくれる人がたくさんいて、「ストレスがたまったらいつでもつき合うよ」と言ってくれているので、疲れたら彼女たちの手を借りて続けていきたいと思っています。

この子たちにとって、今よりも措置解除になってからの方がはるかに大変です。目指すのは、子供たちの自立、一人で生きていけるように育てることだと思います。一人でも多くの子供たちに養育家庭という安定した居場所が与えられることを願っています。

7　子供を丸ごと受けとめることの難しさ

【里母】

初めに、私が里親になろうと思った理由についてお話します。当時「赤ちゃんポスト」が話題になっていました。生後間もない赤ちゃんが放置されたり、虐待を受けた子の怪我や死亡のニュースを毎日のように目にしていました。そして、映画「誰も知らない」が上映され、これも話題となりました。そのころ夫婦で何度か話し合い、「こうした子供たちに愛情を注いであげられる手立てはないものか、自分たちに何かできることはないか」と思い、里親の登録をしたのです。

私の体験発表は他の里親さんと違って失敗してしまった話です。長期で預かって欲しいと受託したのですが４ヶ月でギブアップしてしまった体験です。

登録後しばらくして幼稚園年長女児を紹介されました。親から虐待を受けていたＡ子は親との連絡・面会もないため、私たちが親代わりとなれるよう交流を引き受けました。Ａ子はとても大人に気を遣う子でしたので、もっとのびのびさせてあげたいと思いました。

交流は８ヶ月間に及び、夫婦で施設に面会に行ったり、動物園・水族館へ出かけたり、買い物やゲームも繰り返し一緒にしました。この間、Ａ子の気持ちがだんだんとわかってきたように思いました。施設でのＡ子は職員たちと本当に楽しそうに生活しているようでした。そしてＡ子は私たちにフレンドホームのような存在を求めているようでした。

しかし、施設の職員は「家族の暖かさや家庭の味を教えて欲しい」と私たちに話し、気が進まないＡ子を説得し、我が家に来ることが決定したのです。その後、施設の幼稚園卒園式には私も参加し、ひとりひとり入学する小学校名を言う場面では、Ａ子は我が家近くの小学校名をはっきりと言っていました。Ａ子なりにいろいろ考え自分で覚悟したんだと思い、私もこのときＡ子を受け入れる覚悟を決めました。そして春休みになり、家族全員でＡ子を迎えに行き、我が家でのＡ子の生活が始まりました。

しかし、小学校入学までの２週間で、私はすでに疲れ果ててしまったのです。それは、Ａ子にとって我が家にあるものすべてが珍しく、どんなものでも赤ちゃんと同じように触り、知恵も力もあるのでどんどん壊れていくのです。私が「それは危ないからダメ」と注意し、止めたと思っていたのですが、あとで気がつくと何かが違っているのです。どこか壊れているのです。玄関に置いてあった印鑑用朱肉は、いつのまにか白い内壁に塗られていました。Ａ子の様子は交流期間とは明らかに言葉や行動が違ってきました。

そして、小学校に入学し登校を開始すると、ますます手をやかせるようになり、朝の着替えはなかなかやらない、手伝おうとすると「イヤ」と拒否するのです。朝食もなかなか食べようとせず時間がかかり、やっと食べ終えた後はすぐに学校まで送っていく、これを毎日繰り返しました。このとき実子の高校生の三男もＡ子に一生懸命関わってくれ、寝る前に歌をうたってくれたり、絵本を読んでくれたりしました。さらに私の疲れている様子を見て家事

も手伝ってくれました。とにかくＡ子に振り回され疲れてしまいました。

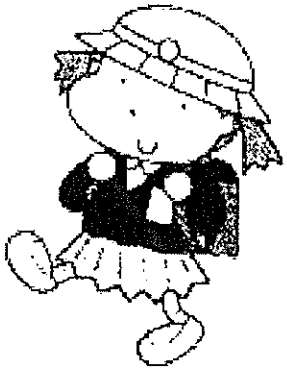
そんな生活が続き、私が高熱を出し体調を崩すようになってしまいました。これまで病気もせず元気がとり得だったのですが、今度ばかりは参りました。児童相談所や施設にも何度も相談しながら、なんとかＡ子とのよりよい関係を築きたかったのですが、関係がよくなることはありませんでした。「かわいいとは思えなくなってしまった」と児童相談所職員にも泣いて話したことを覚えています。そして、Ａ子は施設に戻りました。

今考えると、どうしてあんなにイライラしてしまったのか、もっと優しい気持ちで接してあげていたら、Ａ子の態度も違ったのかもしれない。Ａ子の気持ちに本当に寄り添ってあげることができなかった私は、自分がなんて愛のない人間だろうと思い、里親になれると思っていたことが、本当に思い上がっていたのだと反省しました。今でもＡ子に申し訳ないという気持ちでいっぱいです。

その後は落ち込んで、「次の委託の話はもうないだろうな」と思っていましたが、まもなく一時保護委託の話がありました。小学校 1 年の男児で、母子家庭のお母さんが手術のため 2 週間だけ預かって欲しいとのことでした。私は少し躊躇しました。「また上手くいかなかったらどうしよう」と思い悩みました。でも、我が家からなら通学は継続できることを聞き承諾しました。その子はとてもはっきりした物言いで、素直に自分の気持ちを伝えてくれ、自然に我が家になじんでいました。生活習慣もしっかり身についている子でした。なんだか親戚の子が遊びに来ているような感じで 2 週間はあっという間に過ぎてしまい、無事お母さんの退院時に帰宅しました。

この 2 つの養育体験から、親から虐待を受けた子供に対する認識が自分自身いかに甘かったかということを痛感しました。私はこれまでホームステイの受け入れやファミリーサポートの受け入れを経験してきましたが、どのお子さんも親から愛され受け入れられている子供たちばかりでした。私は今回の失敗で子供の見方を固定化していたことに気づかされたのです。そして、親から全く受け入れられず愛されずに育った子供は、私の思っていた固定観念の全てを捨てて、丸ごと受けとめてあげることがとても大切だということを実感しました。

今後、次のお子さんとの出会いがあれば、その子を丸ごと受け止めきちんと向き合っていけるよう努力したいと思っています。



8　短期でお子さんをお預かりして

【里母】

私の家族は、主人、長男 25 歳と長女 23 歳の４人です。主に短期を専門に登録しています。里親申請のきっかけは、実子が成人し手が離れた時、長女が通っていた幼稚園に児童を通わせていた養護施設を思い出しました。親子共々交流があり、施設の子供達が初対面で私のひざを離れず、抱っこを要求されることは、うれしい反面、少々違和感もありました。初めて見る施設はずっと頭の中に残り、新聞記事で里親を知り児童相談所へ連絡をして話だけでも聞いてみようと思いました。話を聞いている時、責任重大だと心配にもなりましたが、短期里親を知り、第一歩と思い登録しました。家族は皆、簡単に了解し、始めることになりました。登録後、子供のお話は何度かありましたが、実際に委託されたのは１年３カ月ぐらい経った頃に、初めて子供を預かる機会が来ました。

最初は２歳の女児を約 1 ヶ月半お預かりしました。頭の回転が速く賢く、言語力と理解力があり、自己主張もする気が強いお子さんでした。気分は浮き沈みが激しく、すぐ気分が変わります。我が家に来て３日位は気が張っていて頑張っていましたが、段々我がままや意思を通す強い面が出てきました。驚いたのは、普通の夜泣きとは違い、夜中に何時間も泣き叫ぶ夜叫びです。毎晩２、３時間激しく泣き叫ぶことが帰る直前まで続きました。しかし、夜中に「これは夢だよ、大丈夫」と言い続けることで落ち着きました。また、日中も『不安』が強く、突然火がついたように泣き始めます。虐待を受けているのかと周りが振り返る位でしたが、触れられることを嫌がるので、私は落ち着くまで待つしかありませんでした。また、この子は私の前では『ママ』と言ってはいけないと気遣いをする子供でしたし、大人が内緒話で話しをしても驚くくらい大人の会話を聞いている敏感なお子さんでした。

次は、４歳と２歳の姉妹二人。第３子の出産のためお預かりしました。１度母子と面会をし、出産予定日の頃預かる約束でしたが、破水して、突然朝連絡があり、その 2 時間後、おむつ等の準備もしていない我が家に来ました。妹は絵に描いたような天真爛漫な可愛いお子さんで、食べることが大好きな食いしん坊さん。反対にお姉ちゃんの方は、最初妹思いの優しいお子さんでしたが、次第に妹への意地悪が始まり、影で妹を殴ったこともあったようです。また、わざと周囲にいる人を嫌な気分にさせる言動もあり、その時「可愛くないな」と感じましたが、わざわざ嫌われるようなことを言うお姉ちゃんに対して、嫌な思いをさせられながらも、可哀想になるお子さんでした。さらに、自分の思いどおりにならないと自分の頭を叩いてヒステリーのように泣き出すことが、場所を問わず始まります。周りは奇異な目で見ますが「さわらないで」と言うお姉ちゃんが辞めるまで待つことも多々ありました。一応、児童相談所に報告はしていましたが、実親さんは、「絶対に信じられない」と言われました。ただ、実父母のいさかいをずっと見てきたお姉ちゃんは、４歳ながらもお母さんの盾になり頑張ってきたお子さんでしたので、うちに来て爆発したようでした。お父さんのことはお母さんから言われて理解はしているようでしたが、私に、お父さんに怖い思いをさせられた時の話や、シュークリームをお土産に買ってきてくれたことなどを話し、懐かしそうに食べる姿には思わず涙が出て、時に暴力をふるうお父さんでも彼女にとって大事な人であ

ることが感じられました。

その他４～５件程委託にまで至らないお話がありましたが、どの話も急を要しており、委託になった際は家に来るまで短時間に決まるので、対応を一気に迫られるのが、短期の里親の難しい点です。また、委託後の１カ月は、双方様子を見ながら調整をする期間ですが、短期は常に大変な時期の繰り返しだなと思います。里親の方も自分のやり方があり、子供の方も自分達の暮らし方があり、生活習慣の折り合いのつけ方が難しいこともあります。長期であればだんだん歩み寄り合わせていけますが、短期は、いずれ家庭に帰る子供を我が家に合わせることへの迷いがありました。お菓子を１つ買うのにしても、どうしたらいいか解らないまま終わることもありました。また、ゲームが好きな子供は、うちに来た時、犬の話を良くしていましたが、実はコンピュータの中の犬の話だったので驚きました。その後、ゲームは持ってこないようお願いし、外遊びやごっこ遊び、おままごとや絵本など年齢に相応な遊びをなるべくするようにしました。

本来は実親さんと里親は実際に会わないことが前提ですが、実親さんと、どうしても会わざるを得ないような場面があり、実親さんとの関係は難しかったです。

我が家の家族の反応は、長女は妹ができ大喜びでした。最初のお子さんをよく面倒を見ましたが、次の姉妹が来た時、長女は社会人１年目ということもあり悪ふざけの多い姉妹との関係は大変厳しいものがあり、最初のお子さんとは違う対応になりました。間に入った私達も戸惑って見ていましたが、実子に対しても良い勉強だと思いました。

受託することは問題が次々に出てきて疲れる事もありますが、同じ区内の里親さん同士で話を聞いてもらい助けられ、また頑張ろうという気持ちにさせてもらいました。

大変なことばかりではありません。最初の子は一生懸命手紙を書いて「お母さんにお手紙を書いているの」と言うので、私は実親のことだと思い「それは喜ぶね」と言うと「もう、お母さんはあっちゃんでしょう」と言われました。翌日帰ることが決まっていて、手離したくない気持ちで胸が押しつぶされる思いでしたが、子供が私を母親として認めてくれた嬉しい一言でした。また、姉妹も、最初は４歳のお姉ちゃんは私との間に壁を感じていましたが、最後には、近くの子供園の１日保育に週１回通っていた時、迎えに行くと、先生に「今日１日笑わなかったけれど、ママが来て笑ったね」と言われました。この子なりに、私を一応母親役として認めてくれたことが伝わり、うれしい瞬間でした。下の妹は、来てすぐに私をママだと思い慕ってくれ、実母さんの迎えの時も、私にくっついていました。子供たちが帰る頃になると、可愛くなり離したくない寂しい気持ちと、親元に帰れて安堵する気持ちがありました。

短期間の中で自分なりにやれた充実感と、反対に力不足も感じますが、子供たちの人生で、精神的に安定できる家庭の中で育ってもらいたいと願う気持ちで手放します。私は短期専門で、長期の方とは多少感情的に違うかもしれませんが、子供が体だけではなくて、心の健康を保てるように、一瞬だけでも違う家庭を見ることができる機会があるというのは、「その子の人生にとって後々違いが出るのではないか」というかすかな期待を持ってこれからも短期のお子さんを育てたいと思います。

9　子供との交流から学んだこと

【里父】

私が里親になろうと思ったきっかけは、地元の区で開催された体験発表会に行ったことです。その他何度か行った体験発表会では、子供を預かって苦労したこと、子育ての喜びや素晴らしさ、子供が巣立っていく感動など良い話ばかりでした。今日は私の（里親に）なれなかった話もお伝えしたいと思います。

最初は、『自分たちでもできるのかな』程度の気持ちでした。しかし、児童相談所の話を聞いているうちに、里親になりたくなった３つのポイントがありました。１つ目は、地元の区に里親がいないことです。２つ目は、里親に登録できるのは６５歳未満で、その時私は６３歳でした。また、この頃ＮＨＫで「瞳」というドラマを放映しており、里親をやって下さいという思いを感じたこと。３つ目は、家族でファミリーサポートを１年半経験していたことです。自分の世話好きで面倒見が良いところ、子供に好かれるところには自信があり、今までも知人の子を預かったりしていました。どなたでも一定の要件を満たせば登録することができます。子供とうまくやっていけるかは、次の問題なので是非手を挙げてみてください。

最初の面会は、５歳の女の子でした。この子のために、１０人の関係者が動くことに大変なことなんだなと真剣な気分になりました。初めて会った日から「お父ちゃん」と言って飛んでくるので、少しおやっと思いました。１時間くらい施設で抱っこをしたり、お話をしたりして過ごし、帰るときには非常に悩みましたが、家内が交流に迷っていたのと、児童相談所の人に「無理しなくていいですよ」と言われたこともあり、勇気を出して破談にしてもらいました。

その後、２人目の可愛すぎるくらいの２歳半の女の子の紹介がありました。交流が始まり、施設に出向いて１～２時間、折り紙を一緒にやったり、お絵かきをしたり、ブランコに乗ったりという交流を６回程しました。その間に食事の介助や、オムツの取り替え方も習いました。２ヶ月目も同じように交流し、３ヶ月目に入るときに、初めて自宅に来ました。３ヶ月目の後半になると、面会前に「お父ちゃんに会える」と興奮し、また面会後は、「お父ちゃんとお母ちゃんの話をします」と保育士さんが言っていました。そんな中、信じられないのは一度も目を合わせてくれないことでした。私達がよそ見をしている時に視線を感じてはいました。なかなか心を開かない子だと感じました。４ヶ月目に入ると、今度は突然まばたきもせず、じっと見つめます。しゃべりもせず、まばたきもしません。その途端に、突然歌を歌い始めました。私も一緒になって歌いました。すると今度は大泣きが始まりました。笑う、歌う、泣くと自分の嫌なところも見せてくれるようになり、ようやく心を開いたのかな、わがままを表せるようになったのかなと思いました。

４ヶ月目の半ばに打合わせをして交流の時間を長くすることになり、半日→１日→できればお泊りという話になりました。交流は、保育士さんが一緒でないと行動できませんが、「…

番好きなのは誰？」と保育士さんが聞くと「お父ちゃんとお母ちゃん」と言っていたようです。４ヶ月目の後半、車で外出し、歩きたくないという態度をしたとき、保育士さんが「抱っこしてあげてください」と言いました。はじめは躊躇していましたが「大丈夫です」と促され、初めて抱っこができました。

５ヶ月目に入り、２回ほど自宅で１日交流をし、非常に楽しい時間を過ごすことができました。ただ、「必ず今日は帰れる」という安心感からうまくいっていただけでした。５ヶ月目の半ば、外泊開始になりましたが、駅で私達のところに来ようとせず、突っ張って帰りたがる姿を見て、本人が理解し納得していない様子を感じて、絶対危ないなと思いました。自宅に来ても、今まで入った家に入りたがらず、２歳児なので抱っこして無理に家に入れてしまったのが外泊の始まりでした。

夕方になると、帽子をかぶり、洋服を着て、持ってきたもの全てをリュックに詰めて、靴を履いて玄関に立っています。「あなたはここの子供になったんだよ。帰らなくていいんだよ。」と言っても伝わりません。相談すると「１週間様子をみてください。最初はみんなそうです。」と言われましたが、１週間経つと、更に別の行動が始まりました。お風呂に絶対入らない、食事を一緒に食べない、オムツを絶対に替えさせない、私達が用意した布団では寝ない、施設から持ってきたにおいのついたバスタオルと枕だけで、大広間で１人で寝ます。鼻歌を歌い、ご機嫌にみえましたが、おそらく怖いから歌っていたのだと思います。その後も、物を壊したり、悪さも始まりました。「試し行動」とは言われていましたが、「えらくキツイな」と思いました。

そんなわけで、結論としては、最初は何とかしよう、丸め込んでなだめておこうと思っていましたが、２週間続けたら、２人ともくたくたになってしまいました。数時間預かるファミリーサポートと２４時間の里親は全く違いました。夜中に『ちゃんと寝ているだろうか。寒くないだろうか』と見に行くことも続き、そのうち妻は食欲がなくなり、私は血圧が上がってしまいました。もっと辛い経験も人生でしてきたのに、２歳の子供の養育で体調を崩してしまうなんて、非常にがっかりしました。そして、我々がつらいのと同じように、この子はもっと闘っているんじゃないかと感じ、児童相談所に電話をして施設にお返しすることにしました。２週間も一緒にいたのに、施設についてドアを開けた瞬間、振り返りもせず、「タッタッタ」と中に入っていく姿を見たときは本当に悲しかったです。苦しみから解放され自由になったという感じです。間もなく、交流中止の連絡をもらいましたが、我々としては納得できず、一旦間を置いて２～３年後にもう一度見させてほしいと思いました。

しかし、今思うと、やはりその子と過ごした２週間は心に残っております。その子の立場になって仕方ないかと思うようにしましたが、今でも何とか幸せにしてあげたかったなと思っている状況です。

10　育てることで自分も育つ

【里父】

私は、受託した中学１年の女子でＳちゃんについて話をしたいと思います。Ｓちゃんの父親は日本人ですが、母親が東南アジア系の方でした。Ｓちゃんは良い子なんですが、自閉症に近い非常に難しいお子さんでした。性格が暗く、これは弱ったなと思いました。そこで妻と相談し、誕生日のお祝いなどを盛大にやったり、妻がＳちゃんといつも一緒にお風呂に入るなど、まずスキンシップを図ることから始めました。ただ、母親が日本人ではないので、お風呂等習慣が違います。最初は戸惑いました。また、親戚とはＳちゃんを連れて積極的に行き来し、隣近所にも積極的にお付き合いをしました。

Ｓちゃんは、４～５年間登校していなかったということなので学校に行って校長と話をしました。学校は、難しい子はちょっと預かりたくないというようなことを言いましたが、私の妻は都立高校、中学校で自閉症児の担任を経験していますから、「それはおかしいのではないか、『万人は一人のために、一人は万人のために』という言葉があるじゃないですか」ということで食い下がりました。

また、面接のため中学校へ連れていく場合でも、私と妻がＳちゃんを間に挟んで出かけて行きますが、学校の近くまで行くと１人だけ後ずさりしてしまいます。「どうしたの、今日は行きたくない？」、そんなことを何回も繰り返し、やっと学校に行きました。学校の方では特殊学級に入れたいとのことでした。その特殊学級というのは１学年５～６人で、中には本格的な自閉症児みたいな子もいて、雨の中でも飛び出して走り回る子や、泣き出す子、風が吹くから学校に行かない子など、いろいろな子がいました。

中学校は、皆さんもご承知のように義務教育ですから、勉強ができてもできなくても、３年間学校に行けばところてんみたいに押し出されます。単位制ではないんです。ですから、私と妻は毎日交代で学校に行き、教室の後ろに座って授業の参観をしました。Ｓちゃんには、高校へ進学し、学校の教員や看護師になって、自立できる人になってほしいという思いからでした。半年間位これを続けました。雨の日は私の車で送り迎えをしました。

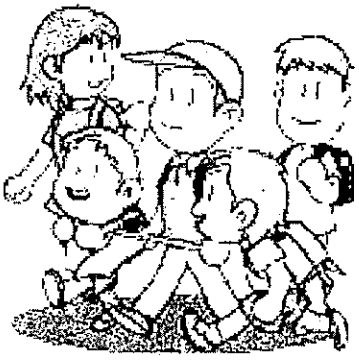
そのうち本人もだんだん、このおじさん、おばさんは大丈夫だとわかったのでしょう。ぽつりぽつりと自分のことを話し出しまして、人は何で生きるんだろうとか、そういった哲学的な問題をどんどん言うようになりました。また、我々も自分の子と同じように、芳しくないときは真剣に怒りました。

勉強は、妻と私が交代で１日３時間、学校の授業以外にやりました。また、夏休みには水泳ができないので、周辺市の学校開放日に妻と私と３人で毎日プールに行きました。７月の初めには全然顔を水につけられなかったのが、９月の初めには平泳ぎで 100 メートル、クロールで 50 メートル、背泳ぎでも 50 メートル泳ぐようになりまして、だんだん本人も明るくなりました。自信を持ってきたのでしょう。私の住む市では、学期末のテストは本校と

同じテストをするのですが、少数、分数、掛け算の九九から再教育しましたから、何と前期の学期末は３番でした。数学３番、英語は４番、国語、理科が４番で、社会がちょっと落ちますが６番か７番でした。特に歴史が弱かったです。そこで、旅行にもどんどん連れて行くようにしました。

また、ピアノも東京芸大出身の先生に習わせたのですが、同じ歳の子は皆かなり難しいところにいっているけれども、本人はバイエルの基礎から始めました。ですから、担当の児童福祉司さんには、ピアノなんかやりたくないと嘆いたようですけれども、すぐ追いつくよと励まして、暮れには先生と連弾をやるまでになりました。

旅行も、京都へ行けば京都の歴史、奈良の歴史、犬山城の歴史、桜の頃になると、松平忠輝が流された高遠城へ連れていって、いわれから落城の話をしたら、「おじさん、社会っておもしろいね」と言うようになりました。どんどん慣れてきて、12 月末には家族風呂に入るようになって、心を許してきたんだなと思いました。１年で成績がぐんと伸び、水泳も伸びて、明るくなりました。また、私自身もごみ出しも妻に「おまえやれよ」と言っていたのが、率先してやるようになりました。「Ｓちゃんもちょっと手伝って」と中へ巻き込んでいきました。非常によい子になりました。

そういうことで、ぜひ皆さんにも１人でも２人でも、『一人は万人のために、万人は一人のために』ということで、一人でも多くの子供が、大人として自立する手助けを担っていただければありがたいと思います。また、養育家庭の皆さんの心情も理解していただいて、今後ともご協力をお願いしたいと思います。

私は、この１年間で非常に成長させていただきました。妻が今年の初めにがんになり、現在、化学療法で療養しています。大分良くなってきたので、来年４月からまた、子供を預かって面倒を見たいと思っています。面倒を見るというより、見させてもらうというか非常に楽しみです。育てることで自分も育つ、それで人生が豊かになると思います。私の子供たちも自分の妹のようにかわいがってくれました。皆さんもそういう子がいましたらひとつ今後力になっていただければ幸いと思います。